

第6章 吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑦

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

吉本隆明は中山みき『おふでさき』の「解説」(『思想のアンソロジー』)の末尾において次のように述べている。

「おふでさき」の内容はどのようなことでもないが、本人がいうように韻文でなければならなかった。韻文であることが、憑いた、神の言葉であり、述べられた言葉の意味に何も無いといってよい。散文だったら何でも無いことが、韻文であることで、一種緊迫感と「何かである」を付与している。憑かれたものの力量とってよい。

笑いを忘れないように、憎んだり恨んだりせずに、陽気に暮らさなさい、神はいつでも審判にやってこられるものだ、暮らしはそうしていると次第に良くなっていく……こう言ったことが真理であることの根拠がありうるとすれば、それは何によるのだろうか？ それはどれだけの力で、あらゆる知的に考慮された理念と拮抗できるのか？ それは何によって拮抗できるのか？ これらの問いは依然として謎であると言える。

吉本のいう挑戦的とも思える「謎」に対する縦横無尽の応答として、筆者が捧げた三木成夫追悼文「モーツァルトとジョゼフ・ニーダム」を紹介しておきたい。

三木成夫追悼文(以下、天理やまと文化会議編『G-TEN』第22号特集・「生命の記憶」のまえがき“回顧”に筆訂正したもの)

2011年(80) モーツァルトとジョゼフ・ニーダム

“あのモーツァルトが19歳まで自分のウンコを練っていたんですか”と深くうなずきながら三木先生はいたく感銘された様子である。天理での講演が決まっていた前日の夕方、私は天理駅に先生を迎えに出た。そこで偶然、二十数年ぶりにイギリスのジョン・ニューマン君と出会った。ニューマン君はいまを去る二十数年前天理大学で柔道を学び、現在はBBCの日本語部長の任にある。宿舍が同じだというのでニューマン君にも車に同乗してもらって、38母屋という天理のゲストハウスに向かった。モーツァルトのウンコの話は、その日の夕食であるフランス料理を賞味している時に、ニューマン君の口から突然出た。三木先生にとっては全くの新しい、うれしい情報であったにちがいない。その証拠に三木先生はこのモーツァルトの話、亡くなるまでいろんな人達にしておられたと聞く。この話は、御存知、同じく芸大の名物教授であった野口三千三先生が、彫刻家の第一歩は腸感覚を両手に取り戻すことであり、それには自分のウンコをこねるのが一番ということから、学生にそれを実践させているという、有名な話にあいあったあとのハプニングであった。彫刻家だけでなく、一流の音楽家にも通じる芸術上の真理として、ウンコをねることの国際的普遍性に感嘆されたのかも知れない。この時のウンコの話は、生態学から宇宙論にまで展開されて延々と続くのだが、今回はこの位にしておこう。

さて、三木先生と私の出会いはたしか昭和60年頃であったと思う。私は天理から上京の途中、京都のある本屋に立ち寄った。中公新書の並びに眼を走らせていて、最初に自然に手がのびてペラペラと頁をめくった本が三木成夫著『胎児の世界』という一冊であった。

“過去に向かう「遠いまなざし」というのがある。人間だけに見られる表情であろう。”という文章にまえがきは始まっている。いつものくせで、まえがきの次にあとがきを見る。あとがきは、“この機会を用意してくださった中央公論社の方々に、とくに野中正孝氏に謝辞を捧げるものです。”と終わっている。とにかく私は『胎児の世界』を購入して、新幹線の中でそれをじっくり読んだ。

読み終わった私はこのユニークな著者に会いたくなり、面会を申し出るまえに、著者から謝辞を呈されている編集者の野中正孝さんに会って、三木先生についての情報をまずもらおうと心に決めた。「元の理」の学際的展開を追求している私の目指すところは、著者に「元の理」を「胎児の世界」から解釈してもらおうという点にしばられている。「元の理」とは別名「泥海こぶき」ともいわれるが、天理教祖中山みきが啓示した壮大な人間創造と救済の説話であり、コスモロジーである。東京駅に着きさっそく中央公論社に電話したが、野中さんは『胎児の世界』の編集を最後に退職したとの事。落胆した私は所用のある赤坂のアジア会館におもむいた。オセアニア研究所の小林泉君との約束があったからである。小林君は15年ほど前、私が天理教シンガポール出張所長の頃、南洋大学に留学生として来ていた頃からの知己であり、帰国後しばらくして、日本シンガポール協会の事務局長をもつとめていたことがある。シンクロニシティとはこのことをいうのだろうか。『胎児の世界』をついさきほど読んだことを少しも知らない小林君が私に、「実は井上さん、野中正孝という人物があなたに会いたがっている」という。もちろん私は、『胎児の世界』の著者である三木先生はもとより編集者の野中正孝さんとも一面識もない。小林君の話の聞くと、中央公論社を退社した野中さんを小林君がスカウトしてきて、日本シンガポール協会の事務局長になってもらったというのである。私は同協会発足当初からその活動に関わっていたこともあって、新任の野中さんは協会の過去の記録を読み込んでいくうちに、私のことを知るに及んで是非私に会ってじかにシンガポールのことについて聞きたいという想いをもっているとのことであつた。是非私も会わせてもらいたいというのと、2、3分も経たないうちに野中さんがやってきた。シンガポール協会もオセアニア研究所と同じビルの中にあるから、野中さんがすぐ現われるのは何の不思議もない。しかし、三木先生に会いたいという私の希望は、またしてもこわれてしまった。野中さんは、三木先生は生まれてから伊豆の大島に一回行っただけで、東京より外に出たことはないし、また出ようもしない、一風変わった学者で、まあ私があなたのご希望を伝えても、ご希望を叶えるのは難しいでしょうとの事であつた。

何かいい智恵はないものかと考えていると、『胎児の世界』の中の一文が想い出されてきた。それは胎児の“上陸の形象”について、先生が鶏胚の上陸の発見をされたときのことを、最も感動的に語られている文章で、かの有名なケンブリッジ大学の生化学者であったジョゼフ・ニーダムについて述べておられるところである。

私はちょうどその頃、天理国際シンポジウム86「コスモス・生命・宗教」の開催に向けて、何をかくそうジョゼフ・ニーダム先生を招請するため、文通を続けていたのであつた。東京の天理国際シンポジウム事務局で、その頃働いていた私の教え子でもあつた飯富幸枝さんが、これまた偶然に東京芸大の出身で三木先生は恩師の一人であるという。そこで彼女にニーダム先生の話の糸口として、「元の理」を先生に読んでもらう事を依頼したのである。芸大の大学院で「能」を専攻していたというこの教え子の紹介で、はじめて「元の理」を読まれた先生は、とにかくその内容に驚かれたらしい。さっそく天理での講演を快諾下され、その時の講演が縁となって、哲学者の市川浩先生との対談が成立した。聞くとところによると、他の東京の出版社がこの二人の先生を会わせようとして、対談のチャンスをおもっていたらしい。

(次号に続く)